



図書館主催の 第4回学術講演会が 開催される

阿部 律子

(佐世保校附属図書館長)

さる11月18日水曜日午後2時40分から図書館主催の第4回学術講演会が図書館1階多目的ホールにて開催された。今回の講演の講師には佐世保市在住でNPO法人「大地といのちの会」代表の吉田俊道氏にお願いした。吉田氏は九州大学農学部大学院修了後、長崎県県庁に農業改良普及員として10年間在職された後、自らの農業理念を実践するために県庁を退職され、出身地の佐世保で有機農業家として再出発された。その後「大地といのちの会」を結成され、現在有機農業家としてだけでなく、九州地域食育推進協議会委員、長崎県環境アドバイザーほか数多くの役職もこなしながら、全国各地で講演をなさり、その名は広く知れわたっている。吉田氏の活躍

は、第一回食育推進ボランティア表彰（内閣府特命担当大臣表彰）や総務大臣表彰「地域振興部門」などにもつながっている。

今回の講演会は「食は人生を左右する」という題目であったためか、いったいどのような話が始まるのかと聴衆は少し緊張した面持ちで講演を待っていた。しかし、いざ講演が始まると、吉田氏のユーモアあふれる熱のこもった語り口は瞬く間に聴衆の心を惹きつけ、終始笑いにつつまれた講演会となり、あっという間に90分が過ぎてしまった。吉田氏は講演を通じて食というものが我々の命や健康にとっていかに大切なものであるのかを説かれ、今一度我々の食の在り方について再考を促された。吉田氏の講演は笑いの中にもぎっしりと食についての知識が盛り込まれていた。

地域政策学科阿部ゼミの3年生に講演会について考えたことを書いてもらったので、いくつか紹介したい。

「今回のこの講演を聴いて、食の大切さを改めて知りました。食をしっかりと考え直すことで病気にも負けない丈夫な体が作れるとわかりました。最近インフルエンザが流行っていますが、食物から免疫をつけるという発想を学び、ファイトケミカルの重要性を学びました。ファイトケミカルは野菜の皮に多く含まれ、皮を剥き過ぎるのもよくないなどわかりました。」

「今回初めて食の講演会に参加したが、これまでの自分の摂ってきた食生活を見直すよききっかけとなった。一人暮らしになると、自炊する回数も減ってきて、お手軽に食べることのできる外食やコンビニのお弁





当などで済ませてしまうのが現状である。コンビニのお弁当にはたくさんの保存料や着色料が含まれていて、日々蓄積されることによって何らかの影響が体に生じてくる。将来、もし結婚して子どもを産む場合大丈夫なのかということを考え、食は生活の基盤となるものであるために今後大切に考えていこうと思った。そして、改善に向けて努力していかなければならないと実感した。」

「今回の講演会はとても楽しく、大変参考になるものだった。食の大切さを改めて感じるとともに、私自身の普段の食生活を見直す必要性を実感した。食べることは人間にとってなくてはならないものであるが、大きな楽しみでもある。私たちの心と体をつくる食について、もっと関心を持ち、正しい知識を身につけなければならない。」

「『いのち』にとって、どういうものを食べるのがよいか、その食べるものをどう育てればよいか、いろいろなことを知ることができた90分は、私にとってとても素晴らしい時間となった。食べるものや食べ方、育て方、どれをとっても現代科学が新たに発見したのではなく、どれも少し前の日本では当たり前のことばかりだった。科学は数値で裏付けされることを重視し、目には見えないものを蔑ろにしてきた。自然が生み出した食べもの

は、我々が知っているような栄養素だけで構成されているものではない。見えないものを含めて構成され、その見えないものこそが大切なのである。」

「大きく変わった現在の食生活はとても豊かだと感じますが、昔の食生活から学ぶことが非常に多いのだと講演を通して知りました。「人の細胞は60兆個あり、毎日1兆個の細胞が死ぬ。そして新しい命（細胞）は食べ物からもらっている。」人は自身の力だけでは健康になれないのだと感じました。生きる力をもらうからこそ人は生命力

の強い野菜を食べる必要があるのだと思います。吉田先生の土作りから始める野菜作りは一貫性のある取り組みだと感心するばかりでした。」

「今回の講演会の中で最も印象深かったことは、植物も人間と同じように、どこで育つかによって違いがあり、土ひとつとっても、まったく栄養分が違ったりと、育てられる環境は本当に重要なのだと感じました。人間も何を食べるかによって、まったく違う体になってしまうのだと思います。人工的に作られたサプリメントや作られたものを食べるのではなく、きちんとした野菜を食べることによって、様々な栄養を摂ることが必要だと思います。」

「吉田さんの講演を聞き、自分たちが食べるものを選択するうえで、今の考え方を改めなければいけないと感じました。自然のもの、旬のもの食べるのはおいしいという理由以外に、体にとって必要であるからだと思いました。食生活を改善して、植物ファイトケミカル（生命力）をいただき、自然のもの食べることによって人間の体のためになるのだとわかりました。」

図書館としても、今後もこうした身近でた
めになる講演会を積極的に開催していきたい
と思った。

在職43年の回想

岡 崎 寛

(地域政策学科)

本学の前身である長崎県立国際経済大学に助手として赴任したのは、昭和42年（1976年）4月でした。3月に大学（東京教育大学－現筑波大学）を卒業した学生気分の抜け切れていない23歳でした。学生時代は、高等学校に勤め、高校陸上界で全国制覇を夢見ていた若者が、新設大学で田園の中にポツンと建つ学舎を見て、佐世保出身といっても今後どうなるのか不安で一杯の船出でありました。高校、大学と進路を迷った時、大学教員への道を選択したのは、高校時代の恩師、平田文夫先生（当時 佐世保高専）の存在でした。平田先生には、教育・研究・人生についても指導、助言をいただき、私が今日あるのも、平田先生との出会いであり、出会いの大切さを痛感し、学生に出会いの大切さを強調するようになった原点でもあります。

4月から勤務が始まりましたが、前期は体育の授業はなく（グラウンド・体育館も未完成）、まだ現役選手だった私にとっては、競技生活での充実した期間でありました。トレーニングに精を出し、競技面で心身共に成長した時であり、各種九州大会等で優勝や全国大会等に出場の経験を得ることが出来ました。後期になり、体育実技の助手として、教授のアシスタントとしてのスタートでありましたが、実質的には全てを任せられ、大学の授業の進め方などの経験はありませんでしたが、体力には自信があったため、走ることを中心とした体力重視の体育実技を行いました。今思うと学生諸君には過酷とも思われる授業であったと思っています。例を挙げると、大学一日野峠往復約8kmを授業中（100分間）に走破、サーキットトレーニングを30分、実

技のテストでは、特にソフトボールにおいて、3塁ベースでの30～50球の連続ノックを実施し、倒れ込む学生が多かった事を記憶しております。冬は、持久走（総合グラウンド外周2.3K×2周）を4～5回実施、出席の悪い学生には、弓張岳まで往復走らせました。当時は学生諸君に体力をつけてやりたい一心でありましたが、同窓会でよく走らされた、ノック、サーキットが厳しかったという話を聞きます。その中で、それを経験したから今の自分があり、体力も維持出来ていると言われると、ホッとすると同時に、情熱が教育ですから、それが伝わったことを嬉しく思っています。

その後、体育の教員が一名増員となり、現在の体制である種目選択制（バレーボール・バスケットボール・バトミントン・卓球・フットサル・ソフトバレーボール・インディアカ・テニス・ソフトボール・サッカー・スキー・ゴルフ・バードゴルフ・シーカヤック等）となり、多くのスポーツ種目から選択できるようになりました。身心の健康増進・維持のため、大いに貢献していると思っております。実技の授業も、1年間1単位から半期1単位となり、カリキュラムの改革で必修選択（必修1、選択4→現在 必修1、選択1）となりました。講義科目（体育講義・保健理論）必修2単位は廃止され、健康科学として現在に至っています。講義は、助手の期間中は非常勤の先生の授業を拝聴し、5年目から保健理論を担当しました（101号教室）。保健全般を講義し、特に栄養については我が国の食生活の現状と問題点を中心に、日本食（穀菜食）の重要性について講義をし、現在も新入生セミナーにおいて、食育についてセミナーを展開しています。

鵬友会の依頼で、36年の思い出を書いたことがありましたが、在職10年目までは学生運動が盛んな時代で、昭和43年のエンタープライズ寄港反対で全学連の学生が大学に

来るといふことで、全教員が学内に泊まり込んで警戒したことをはじめとして、振興会（現在の後援会）闘争では、101号教室で学生自治会から教員全員1人1人自己批判をさせられたこと、産業道路建設反対、授業料値上げ反対、寮建設闘争では教授会室に学生諸君が乱入したり、封鎖されれば、一步も外に出られなかったこと、外部（学長公舎・旅館）で教授会を開催したことを思い出します。意見を異にする学生、先生方と議論し、全学ストにも立ち向かうなど、元気だった（情熱もあった）自分を懐かしく思っています。今も変わらないと学生に言われますが、今後も残りの人生においても、この気持ちを維持していきたいと思っております。40歳代での、国内（筑波大学）・海外（メルボルン大学）研修も思い出として残っております。

研究面では、講師までは調査活動を中心とした社会体育の研究を行いました。助教授からは、生体負担（特にスポーツ環境下における疲労）を中心とした研究を行いました。恩師である平田文夫先生が長崎大学医学部衛生学教室の研究生をしておられた関係で、長崎大学と共同で実験等を実施し、研究成果を発表しました。その結果として、教授に昇進したと思っております。50年代からは、運動不足病（生活習慣病）について、運動と健康という視点で研究し、その啓蒙活動を実践しました。今、ウォーキングがブームになったことを、喜んでおります。

クラブ活動（陸上競技）に関しては、開学から部長・監督としてこれが私の人生といえるぐらい精一杯取り組み、九州一周駅伝に8名（山中・今野・小森・石田・福山・本田・定方・千北）を出場させたり、九州学生陸上競技選手権大会でのやり投げ優勝（安田）、1600Mリレー優勝（原・末長・左巴・水山）など、多くの入賞者を出すことが出来ました。毎日の練習、合宿において、部員より早く、長く、多くグラウンドに立ち、学生と汗を流

し、情熱そのものの毎日でした。現在では、講義（時間割）と私自身の多忙もあり、グラウンドに立てず、今では懐かしい思い出です。

学内では、学生部長を2回（47～48歳・57～58歳）経験しました。大学改革、日の丸掲揚、入試過誤、駐車場建設等が思い出です。学科長の時代には、大学の将来構想について徹夜に近い状況で多くの真剣な議論をしました。これらの議論は、法・情報学部などの構想を経て、地域政策学科として結実しました。

社会的活動では、長崎陸上競技協会理事長を16年間務め、全国大会（全日本中学・インターハイ）を成功させ、平成26年の長崎がんばらんば国体の成功に向けて始動をしています。そして本年度より、長崎県から初めて就任した九州陸上競技協会の理事長として、九州の陸上界、特に九州一周駅伝の改革に取り組んでいます。また、（財）日本陸上競技連盟の理事（24名）の一人としてオリンピック、世界選手権等で日本選手が活躍出来る体制作り等を行っています。この基礎には、本学で43年間陸上競技に携わったことが原点としてあると感謝しております。心残りは、女子駅伝部を創設し、全国制覇するという計画が実現しなかったことです。

教授昇任、海外研修、還暦の時には、鵬友会、陸上部OB・OGに祝賀会を開催していただき、現在も鵬友会の本部、各支部にお招きをいただいております。本学一筋43年間、多くの教授陣、事務職員、卒業生、在学生の皆さんに支えられ、幸せな教員生活を送ることができたことを感謝申し上げ、筆を置きたいと思っております。本当にありがとうございます。

平成21年11月30日 研究室にて。

印象に残る本

野田 遊

(地域政策学科)

小学生の頃、多くの伝記を読み、実力のなさを顧みず、自分の将来に勝手な想像をめぐらせて夢膨らませたことを覚えている。なかでも湯川秀樹の伝記が衝撃的であった。物質が分子よりも小さく分けることができないという兄に対して、もっと小さくできると主張した湯川秀樹は後に中間子理論を発表しノーベル物理学賞を受賞する。日本人を代表するサクセスストーリーに幼い私はこぶしを握り締めていた。

中学から高校にかけては夏目漱石や芥川龍之介、森鷗外などの有名どころの日本の小説を読んだ。文が短く簡潔で表現の適切さに感銘したのは志賀直哉、お気に入りにはセンスが光る横光利一であった。三島由紀夫の小説に至っては息をのんで読み進んだ。一部の作品を除き驚くほど難解で技巧的な日本語の使い方にはただ恐れ入るのみであった。ただし、

『不道德教育講座』は読みやすく笑いのある道徳書であり、人間の心理の裏側が垣間見える内容であった。この頃の読書で全般的に感じたことは、自分よりもかなり以前に生きていた人たちの織りなす感性は色褪せないどころか先進的であるという点である。日本の伝統や文化というとき、古いことが強調されがちであるがそれだけでは評価基準にはなりえず、鮮やかさや新しさこそが相手を感動させる原動力になり、かつクリエイティブであることを読書から教わったような気がする。

高校に入り、海外の小説を読むようになった。お気に入りの作者はアルベール・カミュであり、不条理という概念を知ったとき顔が紅潮したことを覚えている。慣れ親しんだ心臓の音が止まることを喜んで受け入れようと

するムルソーが神父にまくし立てる『異邦人』の最後の場面を読んだとき、鼓動が速くなった。人はおよそ合理的な行動をとらないことに共感し、その後の私の基底的な信条となった。物事は、合理性だけで説明できないことを前提に考えれば、より客観的な視点が養われることに気づいた。

大学院以降の読書は言うまでもなく学術書が中心である。小説をほとんど読まなくなったので、読書から感性に響く経験はしなくなったが、優れた学術書は、ある研究課題を解明するための論証を目の当たりにできるのみならず、物事に対する捉え方に幅を持たせてくれる即戦力のツールでもある。何度も繰り返し筆者の意図を漏らさず苦勞して読んだ初めての真の学術書は西尾勝『行政学の基礎概念』であった。科学的に論をまとめあげられた文章を読み、とても真似できないと途方に暮れたことを覚えている。

ところで、私が反省すべきは大学時代であった。有り余る時間に比してあまり本を読まなかったのである。時間があるため、ゆっくり本を読めばよいと考えていたがあつという間に4年が過ぎてしまった。このような私が言うにはおこがましいが、ゆっくり考える時間を手にしている学生のみなさん、読書から様々な思想を学びとっていただきたい。



本と二重の出会い

金 綱 基 志

(流通・経営学科)

本や論文を読むということは、一種の出会いであるといえるのではないのでしょうか。いくつかの本や論文との出会いによって、それまでもっていた考え方が大きく影響されるということがあるように思います。私にとってのこうした論文が、1993年にJournal of International Business Studies誌に掲載された、Kogut and Zanderによる“Knowledge of the Firm and the Evolutional Theory of the Multinational Corporation”でした。

ここで英語の論文を挙げるのは気が引けるのですが、なぜこの論文が自分の考え方に影響を与えたのかについて、若干話をしたいと思います。企業はなぜ多国籍化するのか、つまり企業が海外に直接投資を行うのはなぜなのかという問いは、国際経営論において大きなテーマの一つでした。1970年代から80年代にかけては、企業が多国籍化するの、市場が不完全なためであると考えられていました。もしも、市場が完全であれば、海外との活動の調整を組織内部で行う必要性はない。しかしながら、市場には様々なタイプの不完全性が存在する。そのため、活動の調整のいくつかは、市場で行わずに組織内部で行わざるをえないのだと考えられていました。

こうした考え方に対して、上記の論文は、企業が多国籍化するの、市場が不完全なためではなく、市場では困難であることが組織では可能になるためであることが主張されていました。また、市場では困難であるが組織では可能となることの一つが、暗黙知を移転することであることも、この論文の中で述べられていました。

こうした主張は、私に新鮮な驚きを与えるものでした。この論文が、学会に与えたインパクトも大きく、この論文の功績で、Kogut and Zanderは、Journal of International Business Studies Decade Award 2003を受賞しています。私は、この論文との出会いをきっかけとして、市場よりも組織を優位にさせているメカニズム、つまり暗黙知の移転を容易にしている組織のメカニズムとは何であるのかという点を探究してみたいと考えるようになりました。写真の書籍は、こうした点について自分なりに考えたことをまとめてみたものです。

このときに感じたことは、本や論文を読むことも出会いであるが、本を書く中でも様々な出会いがあるということでした。この本を書く過程で出会った方々には、多くのことを教えていただいています。また、そうした出会いは、自分の財産ではないかと考えています。

つまり、本や論文とは、二重の意味での出会いを提供してくれるものと言えるのではないのでしょうか。一つは本や論文を読むときの出会い、もう一つは本や論文を書くときの出会いです。学生の皆さんも、大学での研究を通じて、こうした二重の意味での多くの出会いがあるのではないかと思います。皆さん一人一人に訪れるそれらの出会いによって、学生生活が実り豊かなものになるよう祈っています。



私の図書館デビュー

高橋 秀至

(流通・経営学科)

私は、小さいころ「本」や「図書館」とは無縁の生活を送っていました。本が嫌いで国語が嫌い。そういう私が図書館などに通うはずはありませんでした。しかし、今では、私にとって図書館は、なくてはならない存在になっています。

私が、自ら図書館を利用し始めたのは、大学2年生の春でした。私は大学に入学すると、女子学生が多くて楽しそうだという理由で、会計学研究部に入部しました。そこは、会計学に関する論文—今考えると論文などよべる代物ではないが—を作成し、討論会をするサークルでした。会計学研究部では、簿記2級の勉強を終えると、先輩から新井清光先生の『財務会計論』という本を読むように指示されました。本が嫌いな私は、嫌々その本を読み、「私には勉強は向いていない」と実感しました。2年生になると、自分が書く論文のテーマを決めなければならなくなりました。しかし、本が嫌いであまり勉強をしなかった私は、なかなかテーマを決めることができませんでした。「早く決めろ。」と先輩に迫られた私は、唯一読んだ本である『財務会計論』の最初のほうにあった「資産」という言葉を目にして、思わず「資産とは何かということ勉強したいです。」と答えて、嫌々「資産概念」に関する資料集めをすることになりました。

私が大学の図書館で最初に出会った本は、畠村剛雄先生の『資産会計の基礎理論』でした。そこには、資産概念に関するさまざまな見解が紹介され、畠村先生のオリジナリティあふれる理論が展開されていました。それまで、私は、「資産とは、」といえは一つの答え

が当然のように返ってくるものだと思っていましたので、一言に「資産とは、」といっても、これほど多くの人々によってさまざまな理論展開がなされているということに感銘を受けました。

私は、これまでの一つの答えがある勉強ではなく、いろいろな人の文献を読んで、それを参考にして自分なりの答えを導き出すという勉強の面白さに気がついたのです。それ以来、私は、図書館に通い、文献を集め、それを読み、考えるということを繰り返すようになりました。あれから20年の月日が流れ、気がついてみると、私は、図書館が大好きで、本の虫、勉強の虫—自分ではそう思っていないのですが、妻にはそういわれています—になってしまったのです。

「本」は、勉強をするためのひとつの道具です。ただ「本」を読もうと思っても、特に専門書は、なかなか読めるものではありません。自分の意見構築のために、いかにその道具を使うのか。そういう気持ちで本を読むという図書館の使い方も、ひとつの図書館利用方法としていいのではないのでしょうか。



附属図書館からのInformation

インターネット・AVコーナーが新しくなりました

2階インターネットコーナーとAVコーナーが、リニューアルしました。パソコンは5台増え、プリンタ・椅子・ソファーも新しくなりました。テレビは最新の薄型テレビを導入しています。快適になった空間を是非ご利用下さい。



図書館AVコーナーにあったソファー・椅子は、新館505、506前のロビーと、101前階段下に移設しました。



1F 展示コーナー

平成21年度の図書館講演会「食は人生を左右する！いのちをいただく食の勧め」にちなんで、講演者の吉田俊道氏の著書をはじめ、それに関連した図書を展示しています。

テーマ “食育のすすめ”

- ・生ごみ先生のおいしい食育 / 吉田俊道著
- ・まるごといただきます：ホールドフードのすすめ
/ タカコ・ナカムラ、吉田俊道著
- ・いのちをいただく/内田美智子文
- ・人は食によりて人となる/歌代幸子
- ・食事バランスガイドQ&A/早瀬仁美著
- ・創造的な食育ワークショップ/金丸弘美著



◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/lib>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）
土曜日：午前9時～午後5時まで
休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日（6/4）

編集責任／長崎県立大学経済学部取書委員会 発行所／長崎県立大学佐世保校附属図書館 発行日／2010年1月20日